髙田茉莉亜選手インタビュー

人馬一体

―馬術競技の魅力―

取材・文＝津田麻莉奈　撮影・写真＝谷本結利　（令和元年12月5日取材）

いよいよ今夏に開催される東京2020オリンピック・パラリンピック。今回は馬場馬術で活躍中の髙田茉莉亜さんに、オリンピック開催に向けて知っておくべき馬術のお話や、その魅力について伺いました。

―馬との出会い、馬術を始めたきっかけについてお聞かせください。

私の母が大学生の時に趣味で障害馬術をしていました。その後、ブランクを経て、私が小学3年生になったときに乗馬復帰したいという事で、私も一緒に千葉の乗馬クラブへ連れて行ってもらいました。初めは自分の意志と言うわけではなく、「母が馬に乗りたくて連れていかれた」というのが正しい表現かもしれません。

もともとなんでもやってみたいタイプで、運動をすることも好きだったので、いざ乗馬クラブへ行ったら、馬に乗ることを楽しんでいました。

ある時お誘いを頂いて、千葉県大会に出場することになりました。大会で入賞すると順位によって色分けされたカラフルなロゼットリボンをいただけるのですが、当時小学生の私はそれがすごく嬉しくて。ロゼットリボンをもらうためにやっていたと言っても過言ではありません（笑）。

小学校高学年の頃には障害馬術にも挑戦していたのですが、乗馬クラブの先生から「馬場馬術の方が向いているからちょっとやってみない？」というお誘いをいただきました。始めてみると、ローカル大会ですぐに入賞することができました。さらに中学1年生の時に全日本ジュニア馬場馬術大会に出場して入賞したのですが、翌年

悔しい経験で火がついて、馬術にのめり込んでいきました

の大会で成績が落ちてしまったのがきっかけで、本格的な馬術専門の乗馬クラブへ移ることになりました。

現在は、ドイツの馬術スタイルが好きで、馬術の本場ドイツを拠点に活動しています。トレーナーのもとで月曜から金曜まで毎日朝から3～4時間馬に乗って、厩舎の手伝い、馬のケアも行っています。それ以外の時間はジムへ行ったり、3食自炊をしているのでスーパーへ買い物に出かけたり。

ヨーロッパでは馬が生活に根付いていて、とても身近な存在です。また、トップレベルの馬、選手、トレーナーに囲まれており、刺激を受けて練習に励んでいます。

―馬術をやっていて、これまでで悔しかったこと、嬉しかったことはなんでしょうか。

中学生の頃にブエノスアイレスという馬に出会って、一緒に大会に出場するようになりました。すると、中学生ながら大学生やプロもいる大会で優勝することができ、全国大会まで負けなしで進出。予選もトップ通過で、このまま優勝できると思っていたのですが、決勝でボロボロに崩れてしまって結果は2位。その時初めて悔しい思いをして、試合後に号泣してしまいました。その経験で火がついて、馬場馬術にのめり込んでいきました。どうすれば勝てるのか、どうすれば馬と一体になれるのか、すごく考えるようになりましたね。

これまでで一番悔しかったのは、大学1年生で当時のパートナーであるリカルドという馬と出場した全日本馬場馬術大会です。一年間大会で優勝し続け、何事もなければ全日本でも優勝できるというところで、決められたコースを2度も間違えて結果2位になってしまいました。

でも、これまでを振り返ると、嬉しかったことの方が多いかもしれませんね。なかでも、大学4年生でJOCジュニアオリンピックカップを4連覇できたことが一番の思い出です。2年目、3年目と周囲の期待もありますし、追われる立場にもなっていました。パートナーを信じ切磋琢磨してやっていたので、このときの勝利はとくに思い出に残っています。

―オリンピックの馬術競技には「障害馬術」、「馬場馬術」、「総合馬術」と3種目ありますが、それぞれの特

徴と見所について教えてください。

オリンピックで唯一男女混合で行われるのが馬術競技です。また、71歳でロンドンオリンピックに出場した法華津寛さんがいらっしゃるように、選手の年齢層も幅広く、そういった点も馬術ならではの見所のひとつですね。

障害馬術は、決められた順に障害を落とさないように跳んでいく、陸上のハードル競技のような種目です。スピード感があり、一瞬の判断力や、馬との一体感が鍵になります。選手には、馬に勇気や自信を与える力が求められます。コースは、コースデザイナーが障害と障害の距離や、その高さを決めており、踏み切り地点を絶妙な位置に設定するなど工夫がされています。障害を落としてしまうと減点されるので、微妙なコントロールが難しい点です。

髙田茉莉亜（たかだ まりあ）
平成6年生まれ、東京都出身。慶応義塾大学卒。全日本馬場馬術ジュニアライダー選手権連覇（平成22～23年）。全日本馬場馬術ヤングライダー選手権4連覇（平成25～28年）。現在はドイツを拠点に、馬場馬術のトレーニングに励んでいる。

馬場馬術は採点競技なので、周りに審判員の方が座っている中、決められた演技を行います。競技会場ではクラシックが流れていたり、エレガントな雰囲気で、馬術のフィギュアスケートと称されることもあります。一見静かで馬への負担も少なそうに見えますが、時には前に進みたい馬をぐっとこらえさせ、収縮させて技を行うので、実は一番負担が大きいのは馬場馬術だと言われることもあります。オリンピックに出場すると、最長3日間の試合になるので、その分馬の体調管理は欠かせません。自分だけでなく馬も好調でなければ試合で結果を残すことができないので、馬のピークをどのように試合に持っていくか、とくに気を付けています。

ひとつの演技は6～7分で、その間、バレエのように後ろ脚を軸に馬を回転させるピルーエット、〝欽ちゃん走り〟のような動きをするハーフパス、脚を高く上げてスキップさせるようなパッサージュなど、色々な技を行います。「馬ってこんなことをするんだ！」

続きは下記をクリックのうえ、会員パスワードを入力してください。
全文がご覧になれます。

●髙田茉莉亜選手インタビュー・全文